

東海道五十三次徒歩旅行記

昭和四十三年三月 実行

持山保信



出発点 東京日本橋
昭和43年3月4日撮影





終点 京都三条大橋
昭和43年3月22日撮影



目次

目次

青木進三郎様のこと（まえがきにかえて）・・・・・・・・・・ 7

東海道五十三次・今と昔（原本）・・・・・・・・・・・・・・ 15

付 録

ある青春の十九日間・・・・・・・・・・・・・・ 130

豊橋のオバサン・・・・・・・・・・・・・・ 135

困ったときのあと一歩・・・・・・・・・・・・・・ 139

ブルーノ・フォーレル・・・・・・・・・・・・・・ 142

母にあてたはがき十九葉・・・・・・・・・・・・・・ 151

有富きぬ様よりの巻紙手紙・・・・・・・・・・・・・・ 158

お世話になった人々リスト・・・・・・・・・・・・・・ 163

青木進三郎様のこと（まえがきにかえて）

コロナ禍に翻弄される本年、私は新築以来三十余年間、一度も整理していない書斎の断捨離を試みるのだった。

書斎の整理が主だったが、書き溜めたエッセイの原稿等の中に、大変な宝物を発見した。「東海道五十三次・今と昔」と題する原稿用紙五十九枚の作品であり、古く黄ばんだ封筒の中に保存されていた。

当時浮世絵研究家であつた青木進三郎様からの依頼で、お断り出来ないまま、意を決して書きまとめた紀行文の原本である。

青木様については私のエッセイ集「通り雨」の一編「必殺集金人」で知り合った経緯を著しているので説明は譲るとしても、彼は私にとつては大学卒業後、郷里の阿波銀行への入社を大きく後押しして頂いた大恩人なのだ。その後青木様は私の入社を見届ける様に阿波銀行を退職され、その後高名な浮世絵研究家の金子孚水氏に師事し、自らも「浮世絵手鑑」なる本を著すなど浮世絵研究家として歩まれた。

その彼から安藤広重の東海道五十三次の研究の参考に使いたいとの意向を寄せら

れ、ご恩返しには、ほど遠いとしても拙い文章をお届けした紀行文が、この度、発見した原稿である。昭和四十七年三月に執筆したと記憶しているので四十八年を経て再度、日の目を見たと言うことになる。

「あまやどり」「通り雨」「雨あがり」「八十八カ所巡礼雑感」と一人よがりのエッセイ集を書いてきたが、やけぼくに火が点いたか「東海道五十三次・今と昔」として最後の作品として上梓する決心をする私だった。コロナ禍の中の思わぬ収穫に一筋の光明を感じるのもするのだった。

五十三次を徒歩旅行したのは昭和四十三年三月であつて五十年以上も前の記録であるが私の青春時代の一大成果として本書を私自身の為に、又青木進三郎様へのお礼のしるしとして残しておく所存である。

2020・10・28

著

必殺 集金人（「通り雨」から）

群馬の大学を卒業したが就職は地元徳島の銀行であつた。最初から銀行に就職するつもりではなく、某女性下着メーカーを希望していたのだが、関東の名もない田舎大学はダメと丁重に断られた結果、転進せざるを得なかつた訳である。

ゼミの教授に相談すると、即座に下着メーカーの人事部まで電話をして「ゼミで一番の優秀な学生だが宜しく頼む」とまで云つて下さつたにも拘わらずダメだつた。

きつと嘘がバレたのではあるまいか。私がゼミで一番の訳はない、むしろヤツカイモノだつたのだから。

ともあれ就職先を選んだのは地元の阿波銀行だつた。二年先輩が先に入社していたものだから彼を訪ねてみると、本店へ行つて「入れてくれ」と言えば何とかなると教えてくれた。早速本店を訪ねたものの何処のどなたに会えば良いのかも分からず、取り敢えず窓口のお姉さんに声をかけた。

「ここに入りたいのだけれどどうすれば良いのですか？」

驚いたのは若い女子行員、慌てて後ろの方へ逃亡をはかり暫く帰つて来なかつた。

しかしさすがは地方を代表する企業、十五分ほどすると人事部の課長代理さんとやらがやつて来て、「こちらへどうぞ」と二階にある応接室まで連れて行かれた。この課長代理さんこそ私の恩人となる人なのだ。

今もつてお付き合いを頂いているこの方は親切に入社試験の要領を教えてくれたが、最後にだれか支店長の推薦が必要だと言つた。銀行など縁のない私には支店長の知り合いが居る訳もなく困惑していると、意を解してか彼は続けて、「君の住所の管轄は福島支店だから今から福島支店長を紹介してあげよう。その後は君の努力と運次第だ。」

目の前で彼は福島支店長に電話をしてくれた。今から学生さんが行くから氣に入ったら推薦状を書いてくれとも云つてくれた。

訪ねた福島支店長は粹な人だった。「ワカッタ！そんなに入

社したいのなら推薦状を書いてあげよう」といって、私の面接など五分で切り上げ硯を出したと思うと墨をせつせと磨り始めるのである。

「これを持って人事部へ行きなさい」と支店長は巻紙に黒々と墨字をしたためた推薦状を私に手渡して下さった。何だか熱いものを感じたが「ただし人並みの成績は取ってもらわないと困る」と付け加えられた時には流石に身の引き締まる思いがした。

「有難うございます」としか云えなかったが感謝の気持ちは精一杯伝えたつもりだった。

大学三年生の冬休みで街は年末の準備で慌しさが増していた時の出来事だったと記憶する。

翌年の六月には入社試験が東京支店で実施された。朝一番の列車で上京すべく高崎駅の八番ホームに私はいた。朝食代わりに駅ホームの立ち食い蕎麦をかきこみ、お汁をすすする間もなく発車のベルに急がされ飛び乗ったのは急行「赤城」だが、国定忠治の「赤城の山も今宵限りか」じやあるまいに、この日、私と

赤城山との別れは約束される事となった。

東京支店には例のお世話になった課長代理さんが出迎えてくれ、受験申し込み書の印鑑の欄に私が持参した印章を自らが丁寧に押捺して下さった。自分のハンコだから自分が押すものだと思っていたので、課長代理さんが私の代わりに押捺する姿をみて改めて自分を推薦してもらった事に感謝すると同時に責任感も感じ、背筋がゾクツとしたことを思い出す。

内定通知は二週間後に下宿に届き、夏休みを前に私は学生時代で最良の時期を迎える事となる。当時は「企業訪問」などという言葉も発想もなかったが私の行動は今から考えると「企業訪問」のハシリではなかったろうか。

ともあれ私流企業訪問から二年後の春、阿波銀行に入行した私だった。入社前の社内報の自己紹介には「地域の経済の発展に：：」とかなんとか日経新聞から引用した難しい言葉を並べて体裁を整えたものだが新入行員時代は理屈も何も通用しない体で覚える銀行業務に明け暮れた。すなわち一日分の伝票を一冊に綴りこむ作業とか、本店からの現送と称して多額の

紙幣とずつしりと重たい硬貨の袋の運送の手伝い、或いは「必殺集金人」との粹な名前をもらつて、商店街アーケードの売り上げ金の集金を専門に担当した。

もとより銀行員になつたからと言つて、格別なプライドもなかつたものだから「必殺集金人」と呼ばれようが、硬貨袋の「ドンゴロス君」などと言われても恥ずかしくは感じなかつた。

むしろ楽しく毎日が充実していた。商店街は現在と違って大変な売り上げがあり、集金する金額も半端ではない。一日かかつて自転車で走り回り、一万円札が十二束、千円札を二十四束も集金して当時の記録を作つたのも私であつたからマンザラでもなかつた。

必殺集金人は三年生行員までの若手が四、五名ほどいたが二年先輩は慶応大学卒の偉い人だつた。「ケイオーのなれの果てー」と大きな声をあげながらオートバイを走らせて集金に回つていたのを懐かしく思い出す。もう四十年も前の話となつてしまつた。

ない。しかし例の人事課長代理と福島支店長のご恩は決して忘れ

平成二十三年七月 著

東海道五十三次・今と昔

昭和四十七年三月 著

はじめに

はじめに

私が東海道徒歩旅行をしたのは四年前の一九六八年三月であつた。一向に充実しない大学生活から逃避したかつたのであろうか？それとも単に気まぐれだつたのか、いずれにせよ広重の五十三次を東京のあるデパートで見学したのが直接の動機であつたと記憶している。予備知識も持たない私が、広重の足跡を尋ねての徒歩旅行をするに云うのは多少、冒険ではあるが、ただ一つでもよいから広重の時代の東海道を発掘できればと思い、お江戸日本橋に立つたのは春もまだ寒い三月の四日であつた。その日より十九日間の旅は決して快適とは云えなかつたが私にとっては生涯忘れられない大きな感動の十九日間となつた。

途中疲れのため旅を止めようとした事は幾度もあつた。しかしその度に励まされたのは、時間が消し忘れた広重の時代の東海道の風景であつた。旅を通じ私は東海道に濃縮された日本の素顔と、そして日本の心と云うものを少しでも理解出来る様になつたと思う。

広重も東海道に日本の風俗のエッセンスを尋ねて旅行したのであろうが、当時より百数十年を経過した現在でもなお日本人の胸を打つ日本の「ふるさと」と云つたものが東海道には残されていた。銀座の柳に送られ、鴨川の柳に迎えられた十九日間の旅……決して無益な旅ではなかつた。

昭和四十七年三月 著

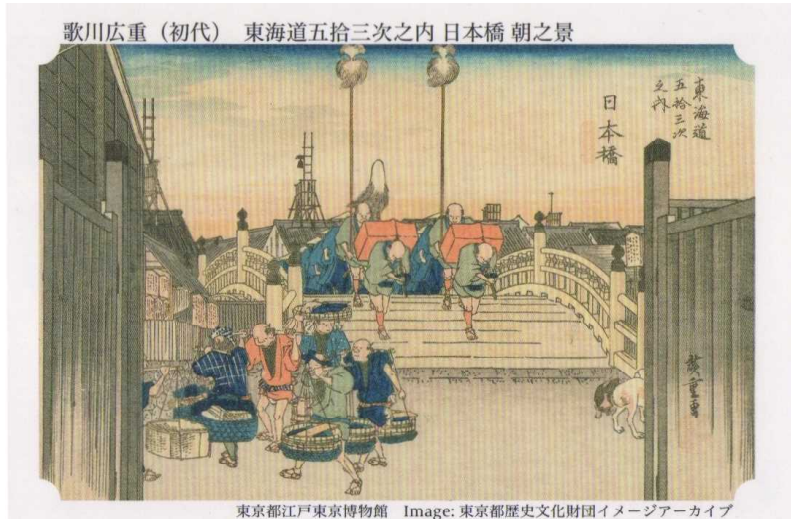
① 日 本 橋

① 日 本 橋

道のりのめどにとらるる日本橋

昔も今も日本橋は全国へ通ずる道の起点であり橋の中程には道路原票が高速道路にはさまれた形で立っている。広重描くところの日本橋は朝の景、出立したばかりであろう大名行列が橋を渡り、たもとには威勢のよい魚屋が五、六人、その表情にもすがすがしい朝の気分が伺われる。ところが現在はどうであろうか、魚屋はサラリーマンに大名行列は自動車の行列と化し、右隅の犬などは居るはづもない。無味乾燥したコンクリートの世界に昔の江戸味などあるはづもなく私は第一歩を踏み出した。京の三条大橋まで五百四十キロ徒歩の旅であった。広重の東海道を尋ねて……

① 日本橋



日本橋

② 品 川

品川は膳の向ふに安房上総あわかずさ

お江戸のはずれ品川は最初の宿場であり、又房総への渡し口としても栄えた宿場であつた。現在の品川は広重の品川よりもずっと海の方へ出てきているため、そのおもかげをとどめないがお江戸の玄関としての働きは今も変わらず東海道線京浜線が湘南と三浦半島を都心につないでいる。道すがらの泉岳寺もなにより旅心を昔に返す存在である。

② 品川



② 品川 日之出 (Shinagawa, The Sunrise.)

日の出前に日本橋を出発した大名の行列は、太陽が顔を覗かせる頃、東海道の最初の宿場、品川付近にさしかかります。茶屋の前を通り過ぎるのは、行列の最後尾の人たちです。画面左には真つ青な海が広がり、停泊していた船も徐々に帆をあげて動き始めています。広重の「東海道五拾三次」シリーズは大人気を博したためいくつもの異なるバリエーションが制作されましたが、この品川宿の別の図には「あなご茶漬け」を売る茶店が描かれているものもあります。お茶づけは、粋な江戸の人々にも親しまれていたのです。

広重

③ 川 崎

二十五と四十で込む渡舟

品川より川崎へと私の旅は続くがやがて六郷の渡しにたどりつく。と云つても現在は六郷橋が東京と神奈川を結び多摩川の水も広重描く青さがない。川崎大師は昔も今も厄除け大師として有名であるが広重もその参詣者で満員になった渡しを描くのわすれない。

のどかな風景も今は工場の煙と車の騒音で見ることがもない。

③ 川 崎



六郷橋

④ 神 奈 川

金川台から箱根を見れば八里の関所も雲の中

と歌われた神奈川は現在の横浜駅の手前を山中へとたどった所がそうである。二百年の歴史は海をはるか沖まで押しやり神奈川の宿をずっと下手へおりた感がある。金川台と云う通り少し大地となり坂道が昔のたたずまいをわずかに土蔵等に残しながら続くが広重描く丁字や、田中家等の割烹旅館が現在も残っているあたり疲れた足にも元気の湧く思いであつた。道は保土ヶ谷へと続く。

④ 神 奈 川



茶 屋 跡

⑤ 保 土 ケ 谷

お泊りはよい程ヶ谷と笛女

戸塚前では放さざりけり（弥次）

昔の保土ヶ谷は飯盛女で有名、朝江戸をたてば、たいいの旅人が一日目のワラジを脱いだのがこの保土ヶ谷であつた。その保土ヶ谷びは今やもう白く塗り立てた井の字^{がすり}紺、紺の前垂の女は居るはずもない。相も変らず排気ガスで充滿したコンクリートの道であつた。

⑤ 保 土 ケ 谷



本陣跡

⑥ 戸 塚

たまくしげこつにわかる国境

所かはれば品野坂より（喜多）

戸塚を過ぎ品野坂を超えれば相模の国、その国境にあるのが境木地蔵。昔は茶店があんころ餅を売っていたそうだ。坂を両方から上つて来た旅人がここで一息つき、甘い餅にい舌つづみを打つたことであろう。現在もうら淋しい山道が当時のまま残っているが坂の上の茶店はなく、私の疲れを癒してくれるのは、ただ汗ばんだ体に吹き寄せるほんのりと暖かい早春の風だけであつた。戸塚の絵は「あめや」が角にあるが今はない。たた「左りかまくら道」としてした石の道しるべが、広重描く戸塚がこの辺であることを証明していた。

⑥ 戸 塚



元町界限

⑦ 藤 沢

紫の色のゆかりの藤沢に

迎えの雲を松ぞ本高き（台歌）

時宗総本山遊行寺は広重の絵にも描かれているが、その藤沢の街の並びも現在と同じであり街のはずれには橋がかゝり、これ又絵と同様左折する。私の旅もはや三日目、首より下がみんな痛み一歩ごとにギシギシと音が立つ。時々みかけられる松並木を唯一の楽しみに平塚へと向かう。

⑦ 藤 沢



遊行寺

⑧ 平 塚

平塚へ来て大江戸を想い出し（台川柳）

広重描く平塚は縄手道、現在は国道がつつ切り、ダンプが土
ぼこりをあげ通り過ぎる。

およそ旅情とは縁がない。ただ高麗山が当時そのままにそび
えるのが印象的だった。

⑧ 平塚



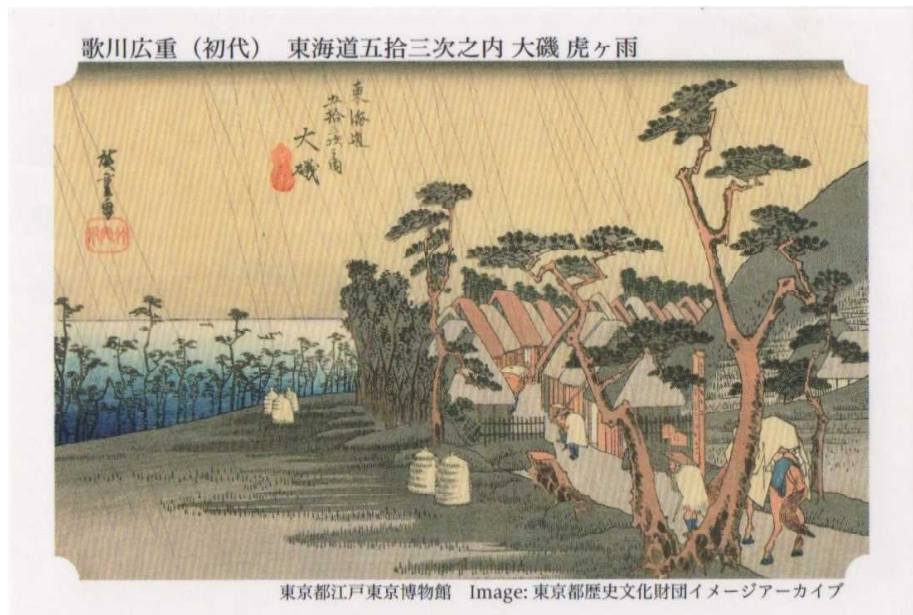
高麗山

⑨ 大 磯

虎ヶ雨大磯、小磯荒れまわり（台川柳）

十郎祐成の愛妓、虎が別れの涙をそそいだ話は曾我討入の話と共に有名、広重もその虎ヶ雨を描くのを忘れない。大磯の海辺の街道は今では吉田邸を始めとする大邸宅の連なりで当時のたたずまいは忍べないが、大磯への途中、バス停に^ケ一里塚と云うのがあつた。旧街道のなごりであろう。街道名物、化粧坂は他でもない、遊女屋の多かつた所、松の並木と共に現在も残るがさびれた場所である。しばしの息をつけば、黄色い遊女の笑い声、そして客引きのおかみ、旅人のつぶやきが松の梢をゆする風の音にのつて聞こえるようであつた。虎ヶ雨の大磯でタイミングよく降り始めた雨のため私は先を急いだ、が、ロマンチックな虎ヶ雨も私には迷惑であつた。

⑨ 大磯



化粧坂

⑩ 小 田 原

小田原へ来て提灯に灯をともし（台川柳）

国府津を出て酒匂川サカワを渡ればもう小田原、広重描く酒匂川のバックの山並はおそらく箱根より湯河原、熱海、伊豆へと通づるものであるうと思われるが、全くそっくりに描かれていて、山裾に広がる小田原の街と小田原城も憎らしい限りである。私の旅も明日は箱根。

⑩ 小 田 原



酒 匂 川

⑪ 箱 根

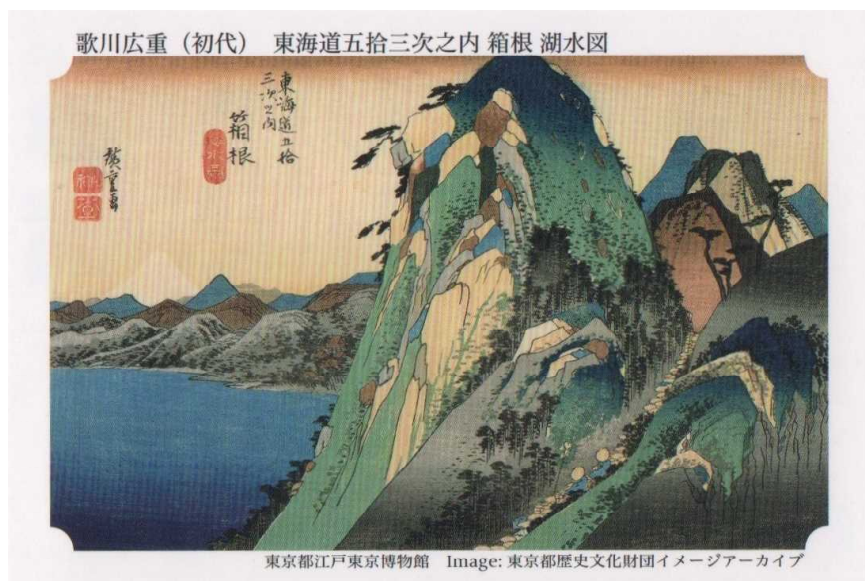
人の足に踏めどたたけど箱根山

ほん堅地なる石高の道（弥次）

湯本より旧道は左へたおれ国道と別れる箱根八里の始まりであるが現在もお当時そのままの山道が随所に残っている。途中の甘酒茶屋も昔からの店、甘酒に舌つつみを打ちながら聞かせて貰う話は神崎与五郎の詫証文、もう何年も同じ話を客にして来た主人も最近はおとづれる人がなく淋しそうであった。

箱根の関所も現在はフリーパス、なんなく過ぎれば眼下に駿河湾、右に富士を仰ぐ峠となる。三島の宿が山道をたどるたびに大きく見え、三島に入れば日もすっかりくれていた。

⑪ 箱 根



箱 根 八 里

⑫ 三 島

朝霞や画にかく夢の人通（藝村）

島 広重の三島は朝霞、大きな鳥居が描かれているが、これは三
神社であり灯ろうもそのままに現存する。



三島神社

⑬ 沼 津

まだ飯も喰はず沼津を打ち過ぎて
ひもじきはらの宿に着きたり（膝栗毛）

⑬ 沼 津



千貫樋

⑭ 原

駿河には過ぎたるものが二つあり。

富士のお山と原の白隠

駿河名物富士山は原からその全容を見せる。街道を行く人を楽しませるには昔も今も変わらない姿であるが、広重も富士を描くことを忘れてはいない。まだ冷たい朝の澄んだ空気が伝わってくる様な絵であるが、田鶴が降りているのは当時一帯が沼地で会ったことを証明しているが現在もなお低湿地である所が多い。

白隠とは禅の坊さんであるがこの地の松蔭寺にいた人物であり、今なお土地の人の親近感是非常なもので、道を尋ねても「ああ、白隠さんのお寺」といつて通じる程である。それだけにエピソードも多いが「すりばち松」もその一つ、なる程境内に大きな松が先端にすりばちをのせて突っ立っている。話のいわれは、昔、岡山の藩主池田継政が禅師に何か贈りたいといったところ、禅師は、大風で裂けた松の雨よけにすりばちを所望し、以来この松はすりばちをのせたまま数百年現在の様な大木にまで成長したと云うしだいであるが、話の真偽は別として街道中でこの様な夢のある話はおそらくここだけであろう。

⑭ 原



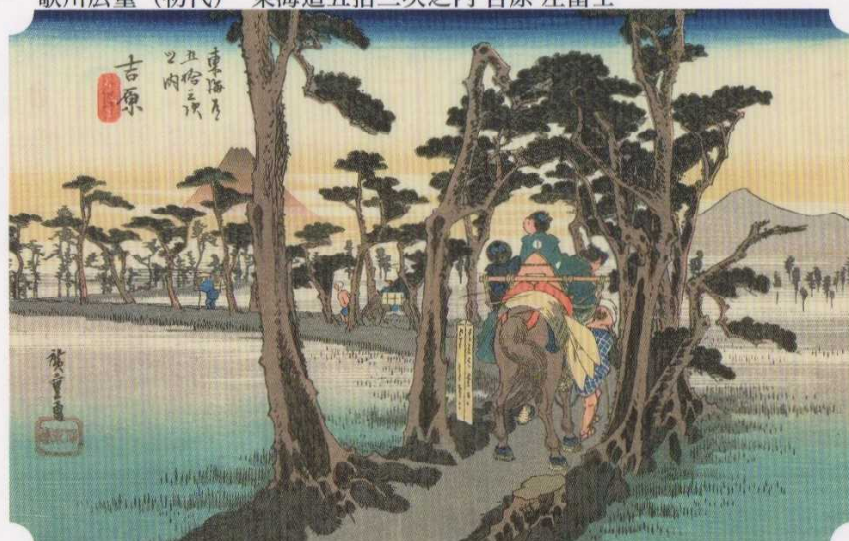
朝之富士

⑭ 吉 原

いま曾我に機縁を結ぶ吾々は
外に一家も一文もなし

広重の吉原は左富士、どうして左富士かと不思議に感じるが京へ上るには、普通、富士は右に見えるものであるが、吉原においてには街道が逆行しわずかの間ではあるが富士を左に望む所があるのを云ったものである。現在の吉原は紙工場の異臭が花をつき、問題の左富士も工場の塀の横、わずかに昔の松並木が一本だけ申し訳みたいに残っている。

歌川広重（初代） 東海道五拾三次之内 吉原 左富士



東京都江戸東京博物館 Image: 東京都歴史文化財団イメージアーカイブ

⑮ 吉原 左富士

(Yoshiwara, Mt. Fuji on the Left.)

江戸から京都へと向かう東海道の旅の途中、富士山はいつも右側に見えています。しかし、本図では副題に「左富士」とあるように、富士山が向かって左側に姿を現しています。実はここ吉原宿あたりでは道が大きく曲がっているために、富士山が左側に見える貴重なスポットがあるのです。こちらに背を向け、馬に乗って進む子どもたちの表情は見えませんが、遠くまで続く松の木の間、富士山を見つけて喜ぶ顔や、はたまた居眠り中の様子などを想像してみると、鑑賞の面白さが一層広がります。

広重

⑮ 蒲^{かん}原^{ばら}

春の夜の雪に音ある板屋かな

吉原を出れば程なく富士川を渡る。いかにも昔の街道がおもかげを残す岩淵の部落をたどると、道が右折する角に向かい会つて少し小高く盛上がった土の上に“えのき”が目につくが、これは江戸より三十七里目を示す一里塚、この一里塚を過ぎれば街道はもう蒲原の宿へとたどりつく。ところで蒲原といえは、「夜の雪」世界的にも有名であるが、しかしこの「夜の雪」に似た坂道、山などは全くこの付近にはなく、またこの辺りでは昔より雪はめつたに降つたことはないと言ふ。

⑮ 蒲 原



蒲原宿石碑

⑪ 由 井

残念ながら原稿が欠落、不明



由井正雪生家

⑱ 興 津

残念ながら原稿が欠落、不明

⑱ 興 津

歌川広重（初代） 東海道五拾三次之内 興津 興津川



東京都江戸東京博物館 Image: 東京都歴史文化財団イメージアーカイブ

⑱ 興津 興津川

(Okitsu, The Okitsu River.)

画面の中央を走るのは、やがて駿河湾へと注ぐ興津川です。この興津川、冬場は仮橋が架けられましたが、それ以外の季節に川を越える際にはやはり人足の力が不可欠でした。面白いことに、本図で広重が旅人として描いたのは、なんとも異例の相撲取りです。巨漢を乗せた駕籠を担ぐ駕籠かきたちの中には、重そうに顔をしかめている者もいます。松林がある背景の一带は、万葉集にも詠まれた許奴美の浜でしょう。帆船掛け船の白い帆が映えます。画面に描かれてはいないものの、興津宿は奈良時代に建立された清見寺でも有名でした。

広重

①9 江 尻

清見たが磯山寺はくれそめて

入り日のこれる三保の松原

江尻とは現在の清水市、三保の松原を遠くに望み風光明媚なところであるが広重描く白い帆かけ舟の群れは遠洋漁業の漁船に変っている。

① 江 尻

歌川広重（初代） 東海道五拾三次之内 江尻 三保遠望



東京都江戸東京博物館 Image: 東京都歴史文化財団イメージアーカイブ

① 江尻 三保遠望

(Ejiri, Distant View of Miho.)

江尻は現在の静岡県清水区です。遠くに愛鷹山系と、万葉の昔から知られた景勝地、三保の松原が見え、眼下に広がる清水湊の水面には、帆をあげて港を往き来する船がはるか水平線近くまで続いています。すこし手前に目を移すと、まだ停泊している船もあり、わずかに見えている宿場町の家々の屋根とともに、静かな雰囲気を感じ出しています。広重は東海道五拾三次のほとんどの図の中に旅人たちの登場させていますが、この作品では目立った人の姿はありません。ただ純粹に、目の前の景色をゆっくり味わってみることにしましょう。

広重

②⑩ 府 中

誰が為ぞ賤しづはた機山の長き日に
声のあや織る春の鶯（古歌）

安倍川の絵で知られる府中だが、この安倍川のたもとに昔から名物として知られた安倍川餅を売る店がある。私も旅の疲れをこの甘い味で忘れたが、弥次さん、喜多さんもこうして安倍川餅をほおばったのであろうか？

②〇 府 中



安倍川

②① 丸^{まる}子^こ

うめ若菜まり子の宿のとろろ汁（芭蕉）

丸^{まる}子^こには今もなおとろろ汁屋^{ちようじや}丁字屋が広重の絵そつくり
に営業している。弥次喜多はここで夫婦げんかに巻き込まれるが、
夫婦げんかが起これば当時そつくりの店である。

㊦ 丸 子



とろろ汁屋

②② 岡 部

豆腐なる岡部の宿に着きてけり

足に出来たる豆をつぶして（弥次）

広重の岡部はおそらく宇津谷峠うつのやであろう。現国道は宇津谷うつのやトンネルでひとくぐりだが、国道は昔ながらにトンネルの手前を右折して峠へと向う。山にしがみつく様に民家があり、広重の絵の通りである。峠を下ればやがて藤枝、旅もすでに三分の一を終ろうとしている。

② 岡 部



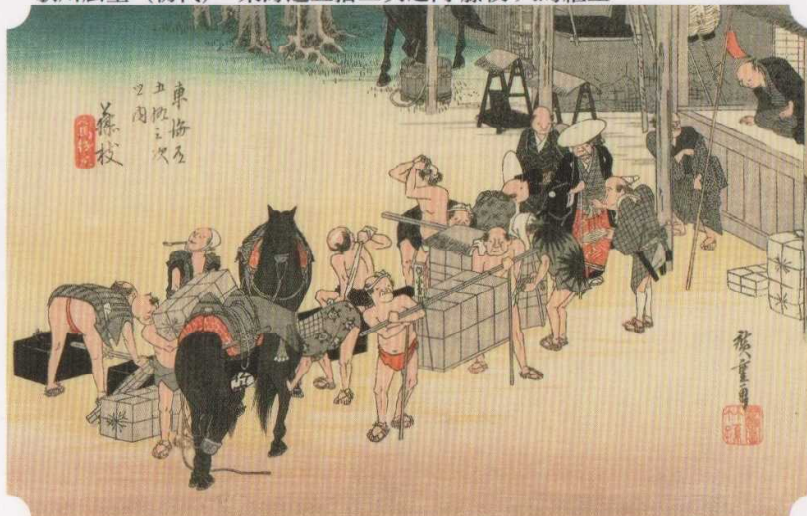
宇津之谷峠

②③ 藤 枝

街道の松の本の間に見へたるは
此れ紫の藤枝の宿（喜多）

②③ 藤 枝

歌川広重（初代） 東海道五拾三次之内 藤枝 人馬継立



東京都江戸東京博物館 Image: 東京都歴史文化財団イメージアーカイブ

②③ 藤枝 人馬継立

(Fujieda, Horse and Porter Supply Station.)

現代では宅配便で素早く簡単に荷物のやりとりができますが、江戸時代には各宿場に設置された「問屋場」といわれる施設で、人足や馬の引き継ぎが行われることで、手紙や荷物が運ばれていました。いわゆる「駅伝制度」です。副題に「人馬継立」とあるように、この作品はまさにその情景を表しています。ようやく引き継ぎを終えて煙草をふかし一息つく人もいれば、帳面を片手に忙しそうに指示を出す帳付けや、天秤棒に荷物を取り付けて出発の時を待つ、少し緊張した様子の人足の姿も見えます。広重の巧みな人物描写によって、同じ場面に居合わせる人々それぞれの異なる心境を想像することができます。

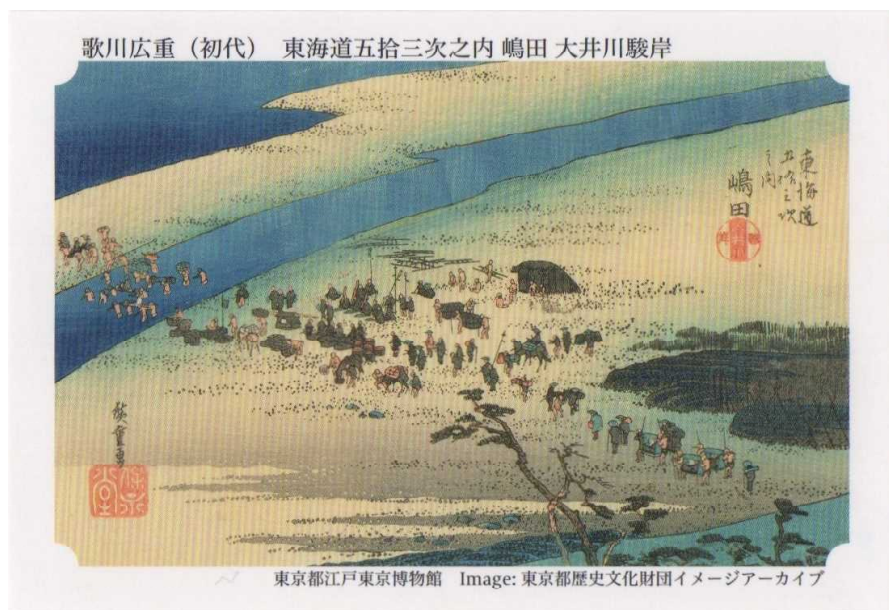
広重

②④ 島 田

駿河から遠江^{とおとうみ}まで肩車（古川柳）

東海道の難所と云えば箱根と、ここ島田、金谷^{かなや}間の大井川、
「超すに越されぬ大井川」―でほんの数分で越される現在では
何かとり残されてしまった感がある。

②④ 島 田



大井川

②⑤ 金 谷

②⑤
金^{かな}
谷^や

五月雨の雲吹き落せ大井川(芭蕉)

歌川広重（初代） 東海道五拾三次之内 金谷 大井川遠岸



東京都江戸東京博物館 Image: 東京都歴史文化財団イメージアーカイブ



大井川

②6 日にっさか 阪

夜啼石小夜姫よりは芸があり（台川柳）

旧道はやがて小夜の中山の夜泣石で知られた峠にかかるが、この道は竹やぶも多く、いかにも静寂そのものの、けわしい道を登りきると扇屋という古い茶屋があるが、ここで名物子育て飴を売っている。七百五十年來この飴をさくつて來たのが当家の自慢、しかし今は客を新国道にとられ、やはり淋しそうであつた。

夜泣石の話であるが、昔、日坂の女が金谷に住む夫を訪ねて行くとして賊に殺されたが、そのときはらんでいた子供は救われて、先の子育て飴によりそだてられた。しかし殺された女の霊は、かたわらの石にのりうつり、毎夜泣くので夜泣石と名付けたのがこの石。

のち弘法大師が仏号を刻み、お経をあげたのでこの泣き声はしなくなり、この子も無事に育つて、そのときの賊を見つけて母のかたき討ちをしたという話である。

②⑥ 日 阪



夜泣き石

②⑦ 掛 川

旅衣袖にも浪を掛りや
ぬれていとはぬ今日の雨哉（古歌）

②7 掛 川



②7 掛川 秋葉山遠望
(Kakegawa, Distant View of Mt. Akiba.)

右手に秋葉山を望み、倉真川に架かる大池橋を渡っている旅人たち。向こうからやってくる僧侶の後ろには、疲れた顔の男が一人続きます。手前からは腰を屈める年取った二人と、彼らとは対照的に元気な様子で進む子供の姿。掛川は太田家五万石の城下町で、この橋を渡れば、道は火防の神様として信仰を集めた秋葉権現へと続いています。よく見ると、画面の枠をはみ出して風が空高く上がる様子が描かれ、遠くにも糸の切れた風が漂っています。実は五月の端午の節句頃、田植えの成功を願って風揚げが行われる習慣がありました。右の方には田植えをする人々、空は深い青の一字ばかりで描かれ、すっきりと爽やかな印象です。

広重

②⑧ 袋 井

茲に来て行来の腹やふくれけん
さればほていの袋井の茶屋（弥次）

②⑧ 袋 井

歌川広重（初代） 東海道五拾三次之内 袋井 出茶屋ノ図



東京都江戸東京博物館 Image: 東京都歴史文化財団イメージアーカイブ

②⑧ 袋井 出茶屋ノ図

(Fukuroi, Open-air Teahouse.)

街道筋に木陰などを利用して設けられた簡単な休憩所を「出茶屋」と言いました。宿場の境界を示す榜示杭のそばで荷物を降ろし、束の間の休息をとる旅人たち。木からヤカンを吊り下げて石のかまどに火をおこしている二人の間には、煙がもくもくと立ち上ります。画面左端をよく見てみると、簡素な店先には草鞋が売られています。長く険しい東海道の旅では、履物の寿命は三日ともたなかったようです。画面右端に目を移すと、立て札の上にはちょこんと鳥が止まり、遠くの田んぼでは農夫がひとり馬を引いています。もうすっかり刈入れが終わったのでしよう、大小の墓塚が並び、秋の気配を感じさせます。

広重

②9 見 付

誰れか来て 見付の里と聞くからに

いとど旅寝の空恐ろしき（古歌）

見附は大河天竜川、その昔は広重描く通り舟渡しであつたが、現在の天竜川橋の下約二百メートルのところあたりから渡つたそうである。しかし昔は難儀な船渡しだつた天竜川も、今は簡単に橋を渡ると中野町、ここは江戸からも京からも六十里というちやうど東海道の真ん中の中野町と云うことで、中野町という名になつたと伝えられるところである。

私の気ままな旅もやつと半分、道端に春をつけるつくしんばにも話しかけたい気持ちであつた。

② 見 付



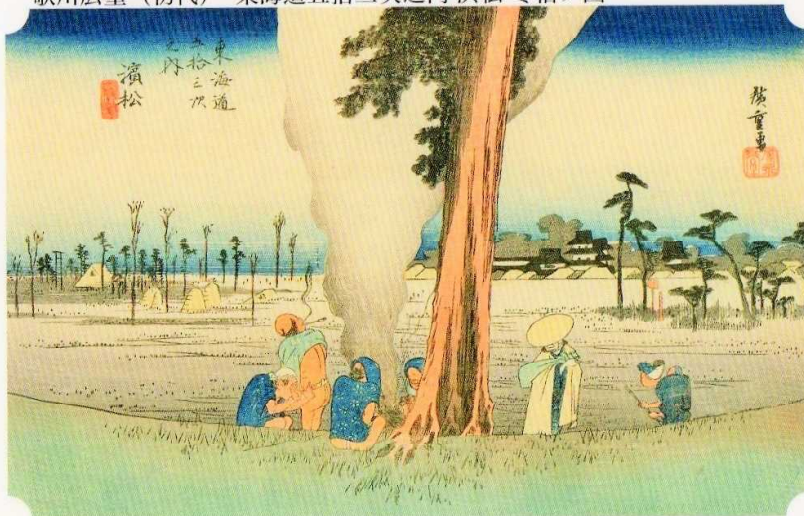
天 竜 川

③⑩ 浜 松

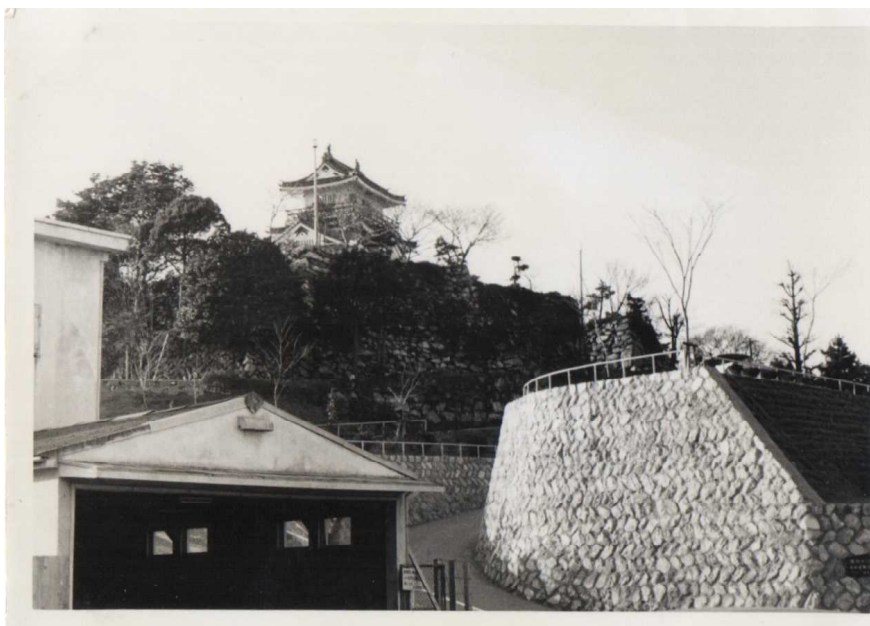
さつ・・と歩むにつれて旅衣
吹きつけられし浜松の風（喜多）

③⑩ 浜 松

歌川広重（初代） 東海道五拾三次之内 浜松 冬枯ノ図



東京都江戸東京博物館 Image: 東京都歴史文化財団イメージアーカイブ



浜 松 城

③① 舞 坂

舞坂で恥しさに富士覗き（台川柳）

富士が見え始めると云うので見附と云う地名が残っているが
実は舞坂からも覗められる。広重も証明するかのように舞坂の
絵に白い富士で描いているが、現在の舞坂、松並木こそ残れど、
弁天島をひかえた観光地となり、夜ともなればネオンの光もま
ばゆく、旅情を味わうにはちよつと俗っぽい感じである。

③① 舞 坂



舞 坂

③② 新^{あら}居^い

舞坂を乗り出したる今^{いま}切^{きり}と

またたく隙も荒井にぞ着く（膝栗毛）

新居と現在は書くがここには関所があつた。箱根が有名だからつい影がうすくなりがちあるが、広重も対岸に新居の関を忘れず描いている。当時そのままの建物で箱根よりも重要な存在とか：・浜名湖とも別れを告げ、私はほこりつぽい旧道をたどつた。春も本格的となり私の汗が背を伝わるのを深いに感じながら苦しい道をたどれば急に視界が開け、遠州灘を一望にできる丘の上に出る。ここが汐見坂。昔、京から江戸へ下る時、はじめでここで海を見おろせると云うことでこの名前が残っているが、風光明媚なことには昔も今も変らず遠く真つ青な遠州灘を見おろす気分はまた格別のもの、海風に汗ひっこみ、私は先を急いだ。今日中には豊橋まで行きたい。

③② 新 居



新居 関跡

③③ 白 須 賀

③③
白^し 須^{らす} 賀^か

今は早願もみちぬ潮見坂
心ひかれし富士も眺めて

③③ 白 須 賀



汐見坂

③④

二 ふ
た
が
わ
川

遠州へ継ぎ合せたる橋なれば
にかわの國を云うべかりける（弥次）

③④ 二 川



三河国・遠江国 境

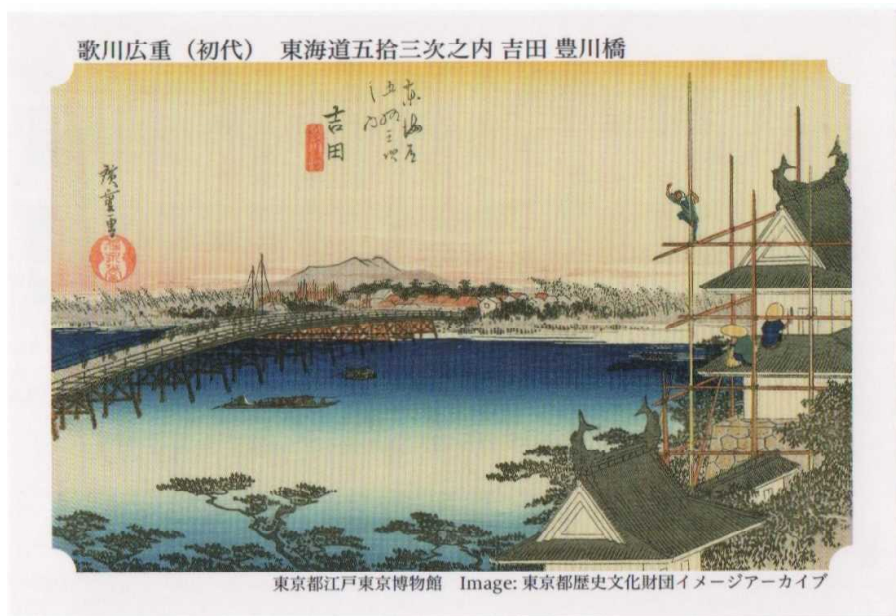
③⑤ 吉 田

たびびとを招くすすきのぼくちかと

此処も吉田のよ（女）達

吉田通れば二階から招く、しかも鹿の子の振り袖がと、うたわれた吉田の宿もやはり今は豊橋市の中心部に当たるところ、広重の吉田とそつくり吉田城が豊川の川辺に建ち、その下を豊橋が渡っている。最も現在ではもう少し上に新しい橋が渡り、広重の絵に描かれている城大工が同じ姿で見つめたら、さぞや驚くことであろうと、おもしろい想像を試してみた。

③⑤ 吉 田



吉 田 城

③⑥ 御 油

もう一里行のだ放せとまらんせ（台川柳）

御油や赤坂、吉田がなくば何のよしみで江戸通いと歌われた御油は遊女屋の多かつたことでは街道一であつたとか。現在も当時のおもかげを格子窓に残してこそおれど昔の賑やかさは、全くなく。取り残された裏街道として淋しい限りの町であつた。広重の描く御油は客引きをする女とそれを断わるのに困つてゐる旅人をこつけいに表現しているが、果たしてこの御油の街、現在の淋しさと昔の賑わいとはどちらが幸せなのであろうか？ 吹きぬける風に女の泣声にも似た響きを感じながら私は御油をあとにした。

③⑥ 御 油



御 油 宿

③7 赤^{あか}坂^{さか}

飯盛も陣屋位は傾ける（台川柳）

御油を出て次の赤坂までは、わずかに十六丁、この間は有名な松並木が残り昼なお暗い所であるがこの松は転園記念物の指定を受けている。赤坂も御油と同じ遊女屋で有名であったが、広重も「旅舎招婦図」として、客をとる女が化粧に余念のない様子を描いている。

この絵の中のソテツは現在もなお、赤坂の玉清山浄泉寺^{じょうせんじ}の境内に残り無言のまま世の移り変りを見つめている様子であった。

③⑦ 赤 坂



現在のソテツ

③⑧ 藤 川

③⑧

藤 ふじ

川 かわ

ゆで蛸の紫色は軒毎に
ぶらりとかかる藤川の宿（膝栗毛）

③⑧ 藤 川



一里塚

③9 岡 崎

宮で泊ろかおかめにしよか

ただしや岡崎よい女郎集

矢矧^{やはき}の岡崎城は街道中で市場の威容を誇っていたが、それよりも

現在の矢矧橋は広重の時代よりも上に移つてはいるが、お城と山を背景にしたこの広重の絵は今と寸分違わぬ写真の様な味をもっている。

③9 岡 崎



岡崎城

④⑩ 池^ち 鯉^り 鮒^う

拾雨の馬、宿々へばつと知れ（古川柳）

現在は知立と書くが、広重の馬市にあたる所、とんと見当もつかない住宅地となり、「馬市の跡」と石碑がわずかに昔の東海道であることを伝えていた。

④〇 池 鯉 鮒



馬市付近

④① 鳴 海

④①
鳴^な
海^み

茲も絞りの名物なれば（喜多）

④1 鳴 海

歌川広重（初代） 東海道五拾三次之内 鳴海 名物有松絞



東京都江戸東京博物館 Image: 東京都歴史文化財団イメージアーカイブ

④1 鳴海 名物有松絞

(Narumi, The Famous Arimatsu Dyeing Shops.)

鳴海宿の東一里に位置する有松は、有松絞りの名産地でした。絹や木綿に藍や紅で絞染めを施した有松絞りは、単純に東海道の土産物というだけでなく、尾張藩の特産品として大切に護られてきました。描かれた二階建ての立派な店の中を覗いてみると、手ぬぐいや浴衣など、とりどりの商品が並んでいます。手前の女性は通りがかりに興味をそそられている様子。店舗の脇には火災に備えた天水桶が、そして店先の暖簾には広重愛用の「ヒロ」の印、版元を示す「竹内」、そして「新版」の文字がさりりと描きこまれ、東海道五拾三次シリーズの宣伝効果を狙った粋な趣向がうかがえます。

広重

④② 宮^{みや}

火をかえす剣あつたへ鎮坐なり（台川柳）

日本武尊の草薙の剣を納めるあつた神宮で有名な名古屋だが、ここから桑名へは海路であつた。七里の渡しとして大変危険の旅であつたそうだが、現在は整備された国道で桑名へは何の苦もなく着く。

④ 宮



熱 田 神 宮

④③ 桑^{くわ}名^な

桑名蛤土産にさんせ

七里渡場貝どころ（台民謡）

広重の桑名は七里の渡口、やっと入港した舟が帆をおろし、まさに客を降ろそうとしている生き生きとした構図である。しかし今は名物蛤も取れなくなり、渡しの港としての役目もないこの街に旧東海道のおもかげはどこにも見られなかった。

④③ 桑 名

歌川広重（初代） 東海道五拾三次之内 桑名 七里渡口



東京都江戸東京博物館 Image: 東京都歴史文化財団イメージアーカイブ

④③ 桑名 七里渡口

(Kuwana, The Seven-ri Ferry Crossing.)

宮宿から桑名宿までは海上七里（約二八キロ）の船旅であったため、「七里の渡し」と称されました。三方を海に囲まれた久松松平氏一萬石の桑名城に、本図ではちょうど二隻の船が到着するところです。船の中を覗いてみると、どうやらたくさんの方々がひしめいている様子。定員は四〇、五〇人程度でした。伊勢内海の海原は鮮やかな青、水平線にはうっすらと山並みが見えています。手前側の海面は色調がまた異なっており、こちらに打ち寄せる大きめの波は、波頭が白抜きの小さな点によって表されキラキラと光を映じる光景が伝わってきます。

広重

④④ 四 日 市

やう・・・と東海道も是からは

花の都へ四日市なり。

四日市に入れば目やのどが痛む。コンビナートのはき出す煙のせいだそうだが、これ又東海道からは想像だに出来なかつた事であろう。三度笠を飛ばされて慌てて追いかける旅人を描くこの絵は明らかに膝栗毛の一節を表現したものであるうが、所々にこの絵に似た湿地が残り木橋がかかっているのはせめてもの慰めであつた。

④ 四 日 市

歌川広重（初代） 東海道五拾三次之内 四日市 三重川



東京都江戸東京博物館 Image: 東京都歴史文化財団イメージアーカイブ



いせ道分岐

④⑤ 石^{いし}薬^{やく}師^し

信心のどっちが固い石薬師（台川柳）

四日市を出て一時間も歩けば追分となる。鳥居が立ち脇の道標には「左いせ参宮道、右京大坂道」としるしてある。鳥居は伊勢神宮「二の鳥居」だが私は道を右にとり黙々と進む。
杖^{つえ}衝^{つき}坂^{ざか}という。日本武尊が東征の帰り、腰の御剣を杖として歩かれたのがこの名のいわれとか。その坂を過ぎて一息つけば石薬師、広重の石薬師寺今もそつくりの山門を一本道の先にくつつけている。ただ住宅ブームはここでも同様、一本道の回りの田んぼも、にわかには建った家で隠されつつあるが、まだそのおもかげは残っている方といえよう。

歌川広重（初代） 東海道五拾三次之内 石薬師 石薬師寺



東京都江戸東京博物館 Image: 東京都歴史文化財団イメージアーカイブ



石薬師寺

④⑥ 庄 野

④⑥

庄^{しょう}

野^の

白^{ゆう}雨^{だち}
や
一
吹
風
の
鈴
鹿
よ
り
(^{冥々})

④ 庄 野

歌川広重（初代） 東海道五拾三次之内 庄野 白雨



東京都江戸東京博物館 Image: 東京都歴史文化財団イメージアーカイブ

④ 庄野 白雨

(Shōno, Rainstorm.)

「白雨」とは夕立のこと。突然降り出したのか、激しい雨に身をかめながら坂を駆け上がる農夫に続き、駕籠かきたちは客が濡れないように駕籠に覆いをかけて進みます。彼らと反対方向へ行く旅人たちも、どこか雨宿りできそうな場所を見つけないと急いでいるかのようです。濃淡に三段階の変化がつけられた背景の竹やぶの描写によって画面に奥行きが生まれ、また、大きくなぎ倒されそうに湾曲したその形状から、強い風のイメージをも掻き立てられます。庄野宿は隣の石薬師宿との間隔が短く、小さな宿場町ではありましたが、叙情豊かな雨の光景を表した本図は、広重の東海道五拾三次のうちでも不動の人気を誇ります。

広重

④7 亀 山

戸を明けておや・・と雪の朝（古川柳）

亀山の宿を出るあたり、坂の上に広重の絵そのままの亀山城が、白壁のはがれもむなしく建っている。しかし雪でも降れば街道一の絵になることはおそらく確かであろう。広重を忍ぶには数少ない場所の一つである。

④7 亀 山



亀山城

関守は手形と黒子ほくろ見くらべる（古川柳）

歌川広重（初代） 東海道五拾三次之内 関 本陣早立



東京都江戸東京博物館 Image: 東京都歴史文化財団イメージアーカイブ

④8 関 本陣早立

(Seki, Early Departure from a Daimyo's Inn.)

かつての鈴鹿の関の跡地、関宿。まだ夜も明けきらない頃、大名たちが宿場内の滞在場所である本陣にて身支度を整えている場面、という珍しい主題の一図です。定紋入りの幔幕が堂々と掲げられ、提灯の明かりのもとで槍などの準備が着々と整えられていく状況は、どこか緊張感を孕んでいます。画面右手に描かれている棹には、宿泊している大名の名を記した関札という木札が架けられ、一方、本陣内には「美玄香」や「仙女香」などといった化粧品の宣伝広告も見受けられます。さらに、奥の足軽が両手に提げている提灯には、広重が愛用した「ヒロ」の紋がさりげなく入れられています。

広重

④9 坂 之 下

筆捨てた山に一刷^{はけ}毛^け春霞（古川柳）

狩野法眼元信が、この附近の山の美しくさに筆をとろうとしたが、余りの勝景に描き切れず筆を捨てたとの話から有名なのが坂之下の筆捨山だが広重は筆も捨てずこの勝景を世に残した。これよりは鈴鹿峠であるが、広重は峠にかかる前の旅人が、まず一息ついている風景を描いている。いかにものどかな情景であるが現在^いは車が騒音をまき散らして走り過ぎるのみであり道端などで憩^いえるどころではなくなっている。

④9 坂 之 下



④9 阪之下 筆捨嶺

(Sakanoshita, Mt. Fudesute.)

関宿から阪之下宿に向かう途中にある名勝筆捨山は、実の名を岩根山といいます。室町時代に狩野派を大成させた古法眼狩野元信が、かつて蓬萊山に似たこの山を描こうとしたもの思うように描き切れず、ここに筆を捨てたという故事に因んで、「筆捨山」の呼称が定着しました。画面左にそびえる奇岩古松の黒い山肌には滝も流れ、厳しい表情です。鈴鹿川を挟んで対岸には立場茶屋が設けられており、本図では旅人たちがそこではっと一息つきながら、目の前に広がる絶景に、旅の疲れもしばし忘れていたかのような様子を垣間見ることができます。

広重

⑤⑩ 土^{つち} 山^{やま}

阪はてるる鈴鹿はくもる

阿日の土山雨が降る（小諸節）

阪——つまり坂の下は晴れていても、鈴鹿の峠を境いにして土山では雨が降っているというように、この鈴鹿峠を境界にしての天気の変化は実にはげしく、私も例外なく雨に会ったが広重も土山に雨を降らすのを忘れてはいない。広重の雨が、この私にも降っていると思えばぬれる苦労も半分は消し飛んだ。

⑤⑩ 土 山



田村神社

51

水^{みなくち}
口

千瓢はぐ手もと涼しき霰かな（古句）

51 水 口



水口旧街道

52 石^{いし}部^べ

伊勢参り石部で固い仲となり（古川柳）

鈴鹿を下ればもう近江の国、近江富士がだんだんと大きく見え目の前に来ればもう石部、言葉も風俗も、もう京都であるが、ここより京まではなお一日の行程を残していた。私の旅も終りに近づき残り少ない道程に広重の跡を追う目も疲れがちだが、広重描く石部の背景の山並は今も私の記憶に残る石部の景色と全く同じである。

52 石 部



酒屋の酒林（看板）

53 草 津

草津よりは間に出てたるかたなれや
早目にかかる志賀の浦舟（古歌）



中仙道分岐

54 大 津

大津から「アのおしやんす」を聞き始め（台川柳）

草津、大津とも広重の跡はみじんもない。しかし草津の追分にただ一つの道しるべが道行く人を見おろしていた。もう百五十年も以前より旅人を見守っていたこの道標には対の様に記されていた。

右東海道いせみち
左中仙道美のち

大津では近江百景で知られる瀬田の唐橋を渡り、ゴールを目ざす私の足もがぜんピッチがあがる。逢坂山を過ぎれば、もうここは京都、長い旅もすでに九分九厘まで終った。



瀬田の唐橋

55 京 都

春左近夏は右近が御所の庭（右川柳）

（追記）期待していた程の感動もなかったのか、ただただ辿り着いたものの疲れ果てたのか、何の記述もない。それとも表現の仕様もばい充実感に浸っていたのか、とにかく筆者の言葉は何も残されていない。

午後二時半頃には確かに京・三条大橋に立つ私が居た筈なのだが。



三 条 大 橋

おわりに

広重の東海道も私の東海道も江戸の日本橋から京の三条大橋までであつた点では同一であるが、現在と当時には余りにも長い時間の経過があつた。そして私は時の経過が少しでも忘れた所を探すのに苦労しながらとうとう終点まで来てしまつた。期待していた程の風景にはぶつからなかつたにせよ。時間が消し忘れた風景に出会ふたび、私は広重に接する事が出来たのではないだろうか？十九日に及ぶ旅は確かに終つた。しかし私の広重を追う旅は、これから始まるのだと云うことを京の三条大橋に立つた時感じた。東海道には人生のすべての場面が濃縮されている。浮世絵の世界的巨匠広重は彩管ふるつてひたすら描き続けたのである。偉大なる日本の風俗を代表した東海道五十三次、いつまでも広重の絵の如く私の心にも、そしてすべての日本人にも残つて欲しいものである。最後に道中お世話になつた人々に感謝して、私の旅を終わりたい。

付 録

拙著「あまやどり」・「雨あがり」より

- ある青春の十九日間（あまやどり）
- 豊橋のオバサン（あまやどり）
- 困った時のあと一歩（あまやどり）
- ブルーノフオール（雨あがり）
- 母にあてた葉書十九葉
- 有富きぬ様よりの巻紙手紙
- お世話になった人々リスト

ある青春の十九日間

東京―大阪三時間の現代、徒歩で東海道五十三次を旅行した青年がいた。何もそんなバカな真似をとという人がいるかもしれないが、なぜ彼は敢えてそのバカな真似を実行したのだろうか？彼は確かめたかったのだ。果たしてつまらないものかどうかを。

その日東京の空は灰色だった。所は日本橋、三月に入っただけはいえまだ薄ら寒かったがそれでも道行く女性の装いには春は確実に感じられる日和であった。

そんな東京のど真ん中、スーツ姿の会社員やOLが足繁く通り過ぎる中、ヘンな男がしきりとカメラのシャッターを日本橋の道路原票に向かって切っていた。背には大きなリュック、その上にはテントらしき物、腰には手拭の山ルック。道行く人も場違



いな存在に一瞥をくれるものの、すぐに無視して足早に通り過ぎて行つた。

彼の名は持山保信、十九歳。東京―京都間、五百十キロ徒歩旅行がいま正に始まらんとする日本橋のひとコマであつた。

「ようし」、彼はそう呟くと元氣に一步を踏み出した。しかしその顔には單なる遊山旅行ではないんだという緊張した氣配を隠す事は出来なかつた。いやむしろこの先の長い道中、果たして辿り着けるか否かの憂いすら浮かべていた。

百メートル、二百メートル、彼はどんどん進む。一步一步また一步。右手に東京駅を見る頃には、すでに彼の額には汗が浮かんでいた。

お江戸日本橋七つ立ち 初のぼり

行列そろえてアレワイサノサ

こちや高輪夜明けて提灯消す

コチャエ コチャエ

コチャエ コチャエは昔の話、彼は華やかな銀座も黙りこくつ

て、何も見ずに通り過ぎた。そして彼の後ろ姿を柳だけが見送っていた。

横浜、藤沢、国府津、箱根、沼津と彼は前進した。最初の三日間は足をひきずりながら歩いた。箱根では大雨と霧に泣きべそをかけた。全身ビショ濡れになった。静岡ではそれが祟って熱を出した。ペースも半分以下になり、もう中止したかったに違いない。今度の駅で列車に乗って帰ろうと何度思ったことであろうか。

彼は孤独であつた。話し相手のいない淋しさから彼は自分とよく話をした。青春とは？ 自我とは？ 大学とは？ 恋愛とは？ あらゆることについて自分と話をした。これまで物事をこんな深く考えたことはなかった。

砕け散って行く青春のエネルギーの一部を考える事に利用する時、彼は何かしら楽しかった。無尽蔵の若人のエネルギーをこんなにも有効に利用しているのは久しぶりの事であつた。心地よい疲労が彼を包んでいった。

或る日の午後、国道一号線というのにツクシンボが一本ポツンと春を告げていた。目ざとく見つけた彼は思わず次のような

会話が交わされるのを耳にした。

「危ないよこんな所へ出てきては」

「ええ、でも知らなかったの、怖いわ私」

「気をつけてな」

「ありがとう、あなたもね、さようなら」

せちがらい現代、とかく無味乾燥的な心しか持たない現代の青年にとつてこれほどに潤いを感じさせる光景があつただろうか。

そうしているうちにも旅は続き、彼のテントの宿も島田、掛川、浜松、豊橋、岡崎、名古屋、桑名と移つていった。桑名で彼は二十歳の誕生日を迎えた。二十歳の感激は彼の薄暗いテントの中でも溢れんばかりに高まつていた。彼はその夜、夢を見た。箱根峠を下る時に見た美しい富士山の夢だった。

「アツ見えた！」思わず口にした言葉だった。三条大橋が見えたのである。彼はもう殆ど走っていた。息は切れそうであつた。も

う新幹線も飛行機も俺を追い越せない、俺はどうとう歩き通したのだ。いろんな考えが頭の中を横切るうちにもゴールはどんな迫って来る。あと百メートル、五十メートル、十メートル、一メートル……ヤッタ！

東京を出て十九日振りに彼はついに辿り着いた。重い荷物をしよつたデンデン虫はやつとゴールインしたのである。しばし彼は呆然としていた。ただもう歩かなくても良い事だけが事実には思えた。東京を出る時は夢にまで見た京の三条大橋に、いま正に立っているにも拘わらず何も期待したほどの感動はなかった。やっぱりバカな真似だったかと彼はフツと思った。そしてすぐに独り言を言った。「バカな真似を確かめただけでも良かった。」

折からの夕日が橋のたもとで休む彼の瘦せた細い肩を赤く染めていた。そして彼の吐くタバコの煙は十九日間の疲労をその一つ一つに乘せて真紅の大空へフワフワと浮かんでいった。彼は黙ってそれを見守っていた。

昭和四十三年 三扇寮文集 寄稿

豊橋のオバサン

東海道五十三次を歩いてみたくなつたのは、ふとした事からだつた。お茶漬け海苔の景品に広重描く浮世絵のセットを貰つたことから始まつた。単純なきつけかけではあつたが、小さな刺激が私の心を捉えて離さなくなり、やがてはその衝動を抑え切れなくなるまでに三か月も掛からなかつた。

十九歳の春まだ早い三月四日の朝、私は日本橋のたもとよりリユックにテント、ナベ、カマ持参でヨイシヨと第一歩を踏み出した。京都三条大橋まで五百十キロ、十九日間の徒歩旅行の始まりであつた。

概して快適な旅ではなかつたものの、行く先々で暖かい人情に触れ、そのお陰で私の旅程は日一日と伸び、落伍することなく無事京都に辿り着くことが出来たのである。その十九日間の旅に人生の縮図を見て、世間の仕組みを手取るように理解する事が出来た。私は責任ある大人への脱皮を急速に完了させる事が出来た幸せ者だつたのかもしれない。

旅先で出会った大勢の人の中で忘れられないのが豊橋のオバサンである。オバサンとは直接知り合ったのではないが、彼女のぐうたら亭主と知り合ったことからこの話は始まる。

豊橋にやつとの事で辿り着いた頃は、もうとつぷりと日も暮れていた。とにかく食事をと飛び込んだのが町外れの大衆食堂だった。ここに居たのが件のぐうたら亭主である。

一見紳士風の彼は私を見つけるや、何かと面倒をみはじめた。食事はもとより酒までご馳走になり、若い頃の軍隊の話などを得意げに聞かされたものである。その時までは何処かの会社社長かと思っていた私は、酒席によつて来た何やら花街の人らしい女性にまでコーヒーなど奢っているのを見るにつけ、随分気前の良い人もいるものだと思心していた。

「コーヒー一杯が八十円とは安いじゃないか、皆に持ってきてやれ。」と大きな声で確かに言っていた。

食事も終わりに誘われるままに彼の家に泊めて頂くことになったものの、その頃から私はなにやら一抹の不安を感じていたが、果たして彼の家に着くや愕然としたのがその住まいであった。棟割長屋の一区画はお世辞にも広いとは言えなくてオバサンと子

供三人が父の帰りを待っていた。高校生を頭に三人の子供は二段ベッドを二つ並べて、父と寢床を共有している有様だった。その長男を追い払ってまで私の寢床を作ってくれるオバサンにお礼を言う言葉も失い、のこのこ付いて来た軽率さを悔いるのが精一杯であつたが、歩き疲れた体は後悔の念をすぐに追払い私は深い眠りに落ち込んだ。

翌早朝、オジサンとオバサンが激しく言い争う声で私の眠りは覚まされた。

「弁当のおかずのメンチカツが六十円もするのか！」

「あんたに言われることはない！」

と、こんな内容だつたような気がするが、私は自分の耳を疑つた。コーヒー一杯が八十円とは安いと言つて女性に奢っていた筈のあの同じ口が、たつた今子供の弁当のおかずが六十円とは高いと言つて怒鳴っている。

目は覚めていても寢床から出るわけにもゆかず、そのまま私は寢た振りをして事態の収まるのを待った。昨夜の後悔を上回る後悔が私の体を押さえつけていた。悲しい事だと思つた。

何事もなかつたような振りをして朝ご飯を用意し、昼食にと

心尽くしのオニギリを下さったオバサンの顔はまともに見られず、お礼も言えたかどうか分らず、私は逃げるようにその家を出させてもらった。彼のぐうたら亭主はまだ寝ていた。

しかし話はこれでは終わらない。数時間後、豊橋城の公園で草むしりをしている作業員の中に私はオバサンを見つけ、心臓が止まりそうになる。彼女も私を見つけ被っていたタオルを取りながら、恥ずかしそうにペコリと頭を下げてくれた。無事郷里に着いたら知らせて下さいとも言ってくれた。

なんと言う事かと繰り返し呟きながら私は豊橋を離れた。悲しかった。

旅を終え、郷里に着いた私が無事到着の旨オバサンに知らせたのは言うまでもない。オバサンには、阿波しじらの小銭入れを、子供たちには文房具を、せめてもの気持ちで送らせてもらったが、オジサンには何も差し上げる気にはなれなかった。

困った時のあと一歩

人生そこそこ長くやって来て「しめた」と思った時より「困った」と思う時が圧倒的に多かった。私だけでなく大抵の人が同じように感じているそうだから、やはり神様は平等に人間を支配しているのだと考えれば仕方ないことでもあるが、一方「困った」となった場合、諦めないで何かの努力、或いはあがきにも似た対応が運不運、幸不幸を左右する事もあるのではとも考える。悟ったようなことを言えた義理ではないが、私は「困った」と思った時はあと一歩頑張ったりもう少し工夫してみたりする事になっている。

言葉にすれば簡単でもその場では冷静になれない時もある、つい怠けなくなる場合もあるものだが、やはりひと工夫した方が結果は必ず良くなるものと信じている。

学生時代に東海道五十三次を歩いて京都まで帰った時の話だが、静岡を前にして私は高熱を出しフラフラであった。前日の

雨に濡れたのが悪かったのか風邪を引いてしまったのである。もうとつぷりと日も暮れて国道を走る車のライトが眩しくて路側を歩くのは危険でさえあった。そんな状態の中、私は旅行を止める事ばかり考えていた。いくら歩いても目的地の静岡駅が見えないのである。

夜の九時になったのを機会に「本当にやめた」とついに言葉に出して言ってしまった私だが、数分間立ち止まって肩で息をしている間も思いリユックは遠慮なく私の体力を消耗させていた。もう思考力もあまり無かった。どうでもよくなっていた。

その時、数百メートル先であろうか赤い信号が見えた。その信号が青に変わるのを見てせめてあの信号まで行つて考えようと歩いてみたのが全ての問題解決に繋がる結果となる。

数百メートル先と思っていたが、本当は百メートルもなかったその信号の交差点に到着した私の目に飛び込んできたのは眩しいばかりの静岡駅の照明であった。殆ど静岡駅に到着しているのに気がついていなかったただけなのだ。それにしても駅を見つめるまで何と周りの暗かったことか、今もって不思議でならない。

目的地に到着したことにより、その夜は静岡大学の学生寮にお世話になり風呂にも入った事もあって「明日も又、頑張ろう」と考え直したのは言うまでも無い。その後、旅行を止めようと思つた事もなく、無事京都の三条大橋に立つたのはその日から十一日後であつた。

この経験がその後の私を変える事になつた。放り出したくなる事が起きる度に「いやもう一度」「いやもう少し」と考え直し、あの日見た静岡駅の明るい照明を思い出すのである。もうダメだと感じた時には案外、問題の答えのすぐ近くまで来ている事が多いものである。深追いしすぎて却つて傷を重くするリスクはあるものの、経験的には圧倒的にうまく解決できた確率が高かつた。九切の功を一簣に虧くような事はしたくない。せっかく努力するものは何らかの成果に結び付けたいものである。

※九切の功を一簣に虧くとは？ 高い山を築くのに最後のもつこ一杯の土が足りないために完成しない。長い間の努力も最後の少しの過失からだめになつてしまうことのたとえ

ブルノー・フオール

フランス人だ。しかもローマン・カトリックのれっきとした神父である。彼とは昭和四十三年三月に知り合った。

当時、私は大学一年から二年になる春休みを利用して東海道五十三次を徒歩での踏破に挑戦しての道中にあり、静岡から島田へと歩を進めていた。東京を出てすでに九日目ともなれば、かなり消耗が激しくて、「旅行を止めて列車に乗って郷里へ帰ろうか」とばかり考えていた。

そうこうしているうちに、島田市の入り口に午後二時くらいに到着したが、ヘンナ外人が車を止めて私に語りかけるのである。

「ドコイク コンバンワタシノ キョウカイニ トマツテイイヨ」

私の事を無銭旅行者とでも思ったのだろうか、はたまた大きなりユックを背負ってヨタヨタ歩いているのを見かねたのだろうか、とにかく親切な言葉をかけて頂いた。

しかし、まだ昼過ぎである。まだまだ先は長いのに誘惑に負けてはいけないと、見栄を張って彼の誘いを断る私だった。

それから三時間も歩いただろうか、島田の街を目前にしたところで、さっきの神父が又しても私を見つけて車を止めて、もう一度、私に言った。

「キヨウカイニ キテ トマツテモイイヨ」

もう夕日も傾き、今日はそろそろ終わりにしようかと考えていた私には、二度目のお誘いを断る理由はない。

神父さんに案内されるままに、カトリックの島田教会に私はフラジを脱いだ。お手伝いのおばさんが「まあまあ、歩いて旅行してるのね、うちの神父は旅行者を見つけては世話をするのが好きなのよ。遠慮なく泊まってらっしゃい。ご飯は七時だから、お風呂を使いなさい」と神父以上の親切おばさんが、その巨体を揺すりながら言つて下さった。

「マリア様つてのは、このような人のことを言うのかな」と勝手な想像をしたが、すぐに罰当たりな発想はやめて、ここは素直に親切に甘えようと決めた。

神父の名前は、「ブルノー・フオール」と言う。戒律厳しいカトリックの神父とはとうてい思えないほど、お茶目で底抜けに明るい御仁だ。ただ、やはり結婚はしていなくて独身である。四十歳くらいだったろうか。

食事は、もしかしてフランス料理じゃないかと期待していたが、日本食で味噌汁までついていた。聞けば日本に来てすでに二十五年も経っているとのこと。どうりで日本語もうまいはずだ。食後に旅行者の芳名録を書かされた。ノートには沢山の人が記載されていて北海道から九州・沖縄まで、殆どの県にまたがっていたが、徳島県人は私が初めてだと非常に喜ぶ神父だった。テントで泊まり、外食ばかりの私には暖かい食事と風呂と柔らかなベッドは何よりの接待であり、明日からのヤル気が沸いてきたのは言うまでもないが、話し好きの神父がなかなか寝かせてくれないのには閉口した。おかげで翌朝はすっかり寝坊して、教会を出発したのは昼食を済ませてからだだった。ただ予定通り行っても行かなくても、どのみち予定など最初から無いのと同じなので気にすることは全くなかった。

そしてこの日から神父ブルノー・フオールと私の縁は固く結ばれ、以後四十年間もお付き合いを頂く結果となるのである。五十三次の徒歩旅行を無事に完遂したことを手紙で報告したが、「徳島にお越しの際は是非ともお立ち寄りください」と、半分は社交辞令のつもりで言ったことから、最初のご縁は、その年の夏休みに早速やってきた。

一通の葉書が着いて曰くには、

「アワオドリ ミニイク トクシマノ トモダチハ アナタダケ」

驚いたのは私の母だった。息子が一宿一飯の世話になっているとあつては、断れない、当時の私は母と弟の三人家族で、住宅も狭い公営住宅だったものだから母の狼狽するのも無理からぬこと、しかし「聖職にある方だから贅沢なことは要求しないでしよう」と都合のよい結論を出した母の考え方は立派だった。

そして彼はやって来た。それもオンボロ自家用車でフェリーに乗ってやって来た。阿波踊り期間中の徳島は一年の半分の観光客が、たった四日間のうちにやって来る。そんな状況を知ってか

知らずか、わずか二週間前に神父から葉書が届き、本当にやって来た。

確か三日間くらい滞在したと記憶するが、最初こそ外国人の来訪にうろたえたものの、ブルノー神父の陽気なお人柄と流暢（とぎどきへん）な日本語のお蔭で我が家はいつになく盛り上がるお盆休みとなる。特に母は意外なほどにハイテンションだった。

近所では「フランスから客が来ている」と評判になっていたそうだ。当時はまだまだ日本のグローバル化は進んでいなかった。ましてや徳島に於いてはやである。

また彼のポンコツ自動車は、観光地の案内にはすごく便利であつた。自家用自動車はまだ珍しい頃の話だから、ホスト側の私達ではあつたが、大いに楽しむことが出来た。鳴門観潮に始まり祖谷のかずら橋等を駆け巡り、夜は阿波踊りの見物を楽しんだ。また、幸いにも滞在期間中は故障もなく、ブルノー号は動いてくれたのだつた。

その後、私は大学を卒業、郷里に戻ったが、ブルノー神父との

お付き合いは続いた。社会人になって五年目に、彼は十年に一度の休暇を与えられて二か月間もフランスへ帰ると言ってきた。チャンス到来！私もフランスへ行ってみようと決心するまでには時間はかからなかった。

一九七六年七月　私はパリ行きルフトハンザ機の中にいた。当時のヨーロッパは、北極回りで、パリまでは約十八時間を要したが、オルリー空港に降り立った時には「これがヨーロッパか」と意味もなく感激した。

ブルノー神父は約束通り空港出口で私を出迎えに来ていたが、短パンにTシャツという軽装だ。知人のマンシオンを訪ね、挨拶もそこそこに荷物を預けて、そのまま国内旅行へと出発したが、彼の車は新しいシトロエンで、日本のポンコツ・ニッサンとは随分と違っていた。いきなりノルマンディーを目指すというが、早朝に到着した私は、時差もあつて二日間寝ないでいることになる。したがって一日目は車の中で寝てばかりいた。

ブルノー神父が貴族の出身であることは、彼とフランス各地を巡る旅をして初めて知った。一週間の休暇をもらって、勇躍臨んだフランス旅行、素晴らしい旅となったが、単純に名所・旧

跡を巡るだけではなく、行く先々で受ける彼の知り合い、友人、親戚の方々からの温かいおもてなしは本当に有難かった。事実、ノルマンディーの宿は地元の貴族のお城だった。改めて、彼の偉大さを知った。

パリ・ノルマンディー・モンサンミシエル・ナント・アンボワーズそしてパリとフランスの西半分を網羅する五日間の旅となったが、振り返ればお城と教会ばかりの旅であって、夜は「明日は早いから神様にお祈りを済ませば寝ましよう」といわれて、午後九時には就寝だ。少しは夜の世界も探訪しなければと大いに張り切っていた私にとつては少々不完全燃焼の感も残る旅でもある。アーメン……

ブルノー神父は、その後、神奈川県教会を転々としたが最後は教会の司祭として活躍した。浜松にも彼を訪ねたが、フランス旅行のアルバムを持って行き、懐かしい若い時代のお互いの

思い出話を夜も更けるまで語り合ったのが、最後の思い出になろうとは知る由もなかった。まだ八十歳を少し超えたばかりの彼だったが、どこかに癌が見つかりカトリックの病院に半年くらい入院した後、音信は絶えた。

一九六八年に知り合い、二〇〇七年に浜松で最後に会って、おそらく翌年にはお亡くなりになったのだろう。お見舞いも、お悔やみも出来ずに寂しいお別れだったが、底抜けに明るいブルノー神父のこと、自分の弱った姿をみせたくなかったのではなかろうか。約四十年のお付き合いを頂いた。

S F映画「バック トゥー ザ フ

ューチャー」が1985年に大ヒットしたが、その映画の中でドク(エメット・ブラウン博士)を演じるクリストファー・ロイドはブルノー神父にそっくりだ。彼が亡くなってから、時々テレビで



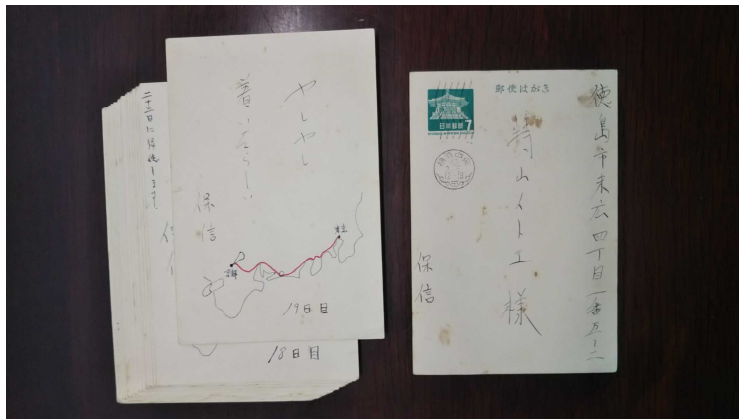
ブルノー・フォール神父

見るたびに、あのお茶目なドクとブルノー・フォールを重ねてみるのである。マイケル・J・フォックス演じるマーティーは私とは似ても似つかない存在であるが、いつかブルノー神父がポンコツ・ニッサンでもなくシトロエンでもないタイムマシンのデロリアンに乗って突然「1976年のパリへ行こう」と現れてくれないものかと妄想する私である。

平成三十年八月二十三日 著

道中 母に宛てた葉書十八集

道中
母に宛てた葉書十八集



三月四日（月）・第一日 横浜泊

疲れたけれどがんばれるよ。

今は横浜国大の寮、少し徳島に近いね。

三月五日（火）・第二日 藤沢泊

首から下はみな痛い、しかし大丈夫。

今日は時宗の本山で遊行寺と云う寺に泊まっています。
明日は小田原まで行きたい

三月六日（水）・第三日 国府津泊

小田原のちよつと手前、足が痛いけれど大丈夫。

箱根山が目の前におおきくみえます。

明日は登ります。

三月七日（木）・第四日 箱根泊

キビシー！ひどい山道だった、しかし大丈夫！

三月八日（金）・第五日 沼津泊

チキシヨー！ 春一番だか十番だか知らねえが台風並みの雨と風とに箱根峠でやられた。

おまけに十メートル先がわからん濃霧。ダンプやらバスがヌーと現れるので身の危険を感じた時はオシもヒキもならん位置。

仕方なしにバスで沼津に降りてサーちゃんの家に泊まってる。クヤシー！

明日はもう一度バスで登って歩き直しする。体はビシヨヌレになつたけれど大丈夫。

三月九日（土）・第六日 沼津泊

今日は素晴らしかった。箱根まで引返して歩きなおしたのだけれど富士山が素晴らしかった。サーちゃんところで又、泊まれます。足も慣れてきました。頑張ります。

三月十日（日）・第七日 由比泊

由井正雪ゆかりの土地で泊まっている。
もう一週間終った。少し自信がついて来た。

三月十一日（月）・第八日 静岡泊

ちよつと疲れた。静大の寮で泊まってる。
雨が降ったので助かった。

三月十二日（火）・第九日 島田泊

親切な島田教会の神父様にお世話になっております。非常に助かりました。

体力的にも限界（ウソ）が近づいていますが、頑張る自信はあります。

三月十三日（水）・第十日 掛川泊

テヘ…今日はいい思いをした。
後日、話すよ。

三月十四日（木）・第十一日 浜松泊
今日も頑張った。明日もやるぞ。

三月十五日（金）・第十二日 豊橋泊
ここまで来るとやめられんヤツタルデ！

三月十六日（土）・第十三日 岡崎泊
雨に会ったけれど平気・平気
明日はいよいよ名古屋

三月十七日（日）・第十四日 名古屋泊
名大の寮で泊まった。
あと少しになつてきたあ。ガンバツカラ。

三月十八日（月）・第十五日 桑名泊
満二十歳バンザイ！ 一人でパーティーをした。

三月十九日（火）・第十六日 亀山泊
早く着きたい。いいかげんあるくのがアキタ。

三月二十日（水）・第十七日 土山泊
又しても雨、ヤナカンジ
今日悟ったこと：「どうも親不幸な僕でスミマセン、心配かけて」

三月二十一日（木）・第十八日 草津泊
どうやらたどりつきそうなケハイだね。
二十三日に帰徳します。

三月二十二日（金）・第十九日
ヤレヤレ 着いたらしい。

有富きぬ様よりの手紙

道中、三月十八日は私の誕生日である。しかも二十歳の目出度い節目を一人旅の空の下で迎える私は何とも嬉しく幸いなことだと思った。

私の旅は桑名まで進んでいたが、夕刻に近づき国道沿いにある大きな鳥居が目に入った。八重垣神社とあるが、臆する事なく社務所を尋ね、学生証を提示の上、今夜のテントを境内で張れないものかとお願いする。

応対して下さったのは宮司の奥様と思しき上品な老婦人であつたが、事の経過を説明する間も彼女は優しいまな差しを私に向けてくれていた。テントの設営はもちろん了承された。

その夜、私はテントの中でたった一人の誕生日と成人式を祝う。桑名駅前の洋菓子屋で大枚をはたいて求めたイチゴのショートケーキもテントの中でローソクを二本立てて気を吐いていた。そのケーキをまさに食べようとした時、外から老婦人の声

がした。

曰くには食事がまだなら準備するから少々待っていてくれとの事である。

程なくして届けられた食事の内容にも驚いた。きれいな重箱につめられた弁当は、正月のおせちの様に豪華だった。

生涯、最高の誕生日と成人式を神様が私にプレゼントして下さったものと確信し、ありがたく頂いた。食後には例のケーキもあつて幸せの絶頂感の中、満二十歳の夜を寝袋の中で熟睡した。

その夜、私は夢を見た。箱根峠を下る時に見た美しい富士山の夢だった。

八重垣神社にお世話になって四日後の三月二十二日、私は京都三条大橋にゴールする。

徳島に帰省後、神社様へはお礼状を出して無事に旅行を終えた事を報告した。

そして一ヶ月も経つたろうか、一通の手紙が大学寮の私宛に届いたのだが、差出人は例の八重垣神社とある。

開封して驚いたのは巻紙に墨書の手紙だったこと。しかも美しい字で綴られていて芸術品のようだった。今までの人生でこのような巻紙の手紙を受け取ったのは、この時が最初で最後である。正に永久保存版であった。

八重垣神社の有富様

ありがとうございました。

当時の写真を収録したアルバムの表紙にこの手紙が保存されていたものを次葉に掲載しておく。

二〇二〇年一〇月二十日 著

有富きぬ様よりの手紙

今日はご丁寧な
お便りありがとうございます
無事お帰りに
なられて安心致し
ました何もして
上げられませずに
喜んで戴けて
恐縮に存じます
梅の花も散り風
薫る五月もすぐ
目の前に来ました
学生の貴方々に
とつても一段とお勉
学の好季節でせう
乱筆にて失礼
致しました
どうかご自愛下さいませ
かしこ



有富きぬ様よりの手紙

四月十八日

有富きぬ

持山保信

様

お世話になった人々リスト（敬称略）

お世話になった人々リスト（敬称略）

村瀬秀夫
加藤あや
富山暢彦
望月武司
ブルノ・フオール
内山弘
和田節男
藤田一行
浅野千枝子
鶴田和明
有富きぬ
長田和夫
中野保治
清水たね

神奈川県足柄下郡橋街街川
沼津市白銀町一六七
神奈川県箱根町元箱根二六
静岡県由比町神澤川酒造
島田市河町菰川三四四
掛川市掛川一二三四
静岡県浜名郡可美村若林九二五の一
豊橋市飯村町茶屋一六
豊橋市三ノ輪町二の四二
岡崎市西上馬崎北側
桑名市八重垣町八重垣神社
三重県鈴鹿郡関町木崎
草津市大路一丁目七番一二号
大津市鳥居川町九の一

東海道五十三次・今と昔

令和三年六月二十日 初版第一刷

著 者 持山保信

発行者 木場 薫

発行所 有限会社 楽学研究社

沖縄県那覇市宇栄原三丁目二十一番七号

電話 098—857—5201